

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	永井 知子
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学 教授） 浜崎 隆司 副主査：（鳴門教育大学 教授） 久我 直人 委員：（鳴門教育大学 教授） 田村 隆宏 委員：（兵庫教育大学 教授） 名須川知子 委員：（鳴門教育大学 准教授） 小倉 正義
3. 論文題目	子育て支援領域における保護者の援助要請と困り感に関する実証的研究
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 永井知子 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査 日時：平成31年2月10日（日）14時00分～14時50分 場所：鳴門教育大学 人文棟 A512教室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 問題の所在</p> <p>第1節 子育て支援に関するこれまでの変遷と今日的課題</p> <p>第2節 子育て支援における援助要請と困り感</p> <p>第1項 子育て支援領域における援助要請研究の概要</p> <p>第2項 子育て支援領域における「困り感」研究の概要と定義</p> <p>第3節 研究の目的と意義</p> <p>第2章 保護者の援助要請からみる子育て支援のあり方</p> <p>第1節 保護者の被援助志向性と精神的健康、ソーシャル・サポートとの関連</p> <p>第2節 保護者の被援助志向性の特徴と援助を求めない理由との関連</p> <p>第3節 保護者の被援助志向性の特徴ごとにみる援助要請のプロセス</p> <p>第4節 小括</p> <p>第3章 保護者の困り感からみる子育て支援のあり方</p> <p>第1節 保護者の困り感と育児ストレスとの関連</p> <p>第2節 保育者が思う「困り感のない保護者」への支援プロセス</p> <p>第1項 若手保育者による「困り感のない保護者」への支援プロセス</p> <p>第2項 ベテラン保育者による「困り感のない保護者」への支援プロセス</p> <p>第3節 困り感タイプごとの被援助志向性と各尺度との関連</p> <p>第4節 小括</p>

## 第4章 援助要請行動と問題状況の認識を促す実践的研究

### 第1節 子育て支援プログラムの実践と効果測定

## 第5章 総合考察

### 第1節 本研究の成果

### 第2節 本研究の教育的示唆

### 第3節 本研究の課題と今後の展望

本研究では、保護者の「被援助志向性」と保護者自身が問題状況をどう認識しているかという「困り感」に注目し、援助要請の意思決定に与える要因の検討を行い、保護者への介入のポイントに注目した子育て支援プログラムを実践することで、保育者と保護者の認識のずれを埋める子育て支援のあり方に関して具体的示唆を得ることを目的としている。

第1章では、わが国における子育て支援領域における援助要請研究と、困り感研究に関する先行研究の概観を行い、問題の所在と本研究の目的を示した。

第2章では、保護者の被援助志向性に注目し、子育てにおける精神的健康とソーシャル・サポートとの関連について、質問紙調査を用いて検討した。その結果、保護者の被援助志向性については、「援助に対する抵抗感」と「被援助欲求」の2因子構造であることが確認され、援助に対する抵抗感の高さは、育児不安の高さや地域支援活動への参加に対するネガティブな意識と関連しており、抵抗感の高さと被援助欲求の低さはそれぞれ身近な人からの特定のサポートを少なく認識することが示唆された。また、保護者の被援助志向性の特徴ごとに群分けを行い、群ごとに身近な人や保育者に対して援助を求めない理由や、ライフイベントとの関連について検討した。その結果、「自力解決群」、「アンビバレント群」、「他者信頼群」の3群に分けられ、それぞれの特徴に応じた支援のあり方が示唆された。

第3章では、保護者の困り感の程度を、子どもとの関わりの頻度と現状の子育て肯定感から抽出し、困り感タイプ別に育児ストレスや育児不安といった精神的健康に違いがあるか検討するとともに、経験年数の異なる保育者が困り感のない保護者にどう対応することで問題解決が行われるかといった支援プロセスについて検討した。保護者の困り感タイプは4つに分類され、それぞれの特徴に合わせた支援のあり方と、困り感のない保護者に対する支援について保育者の専門性を確認した。さらに、保護者の被援助志向性と困り感との関連について検討したことで、介入のポイントが明らかになり、予防的支援の1つとして、子育て支援プログラムの提案がなされた。

第4章では、子育て支援プログラムであるトリプルPを実践し、受講前後で保護者の子育て意識や被援助志向性、自尊感情がどのように変化するのかについて検討した。質問紙調査を行った結果、トリプルP受講前に比べて、受講後の方が「被援助欲求」得点は高いことが示された。また、トリプルPを受講した保護者へのインタビュー調査から、自律的な子育てが可能になると抵抗感が高まる可能性や、参加者同士が互いの子育てを見聞することによる視野の広がりが抵抗感を低くする可能性が示唆された。これにより、子育て家庭への予防的支援の1つとして、子育て支援プログラムの有効性が示唆された。

第5章では、本研究によって得られた成果と教育的示唆について示し、今後の課題を述べることで総合考察とした。本研究によって得られた成果は、保護者の「被援助志向性」、「困り感」それぞれに注目した子育て支援のあり方と、子育て家庭全般への具体的介入のポイントを提案したこと、子育て支援プログラムの有効性を実証的に検証したことである。また、教育的示唆としては、保育者の専門性の向上に向けて、現職の保育者および保育者を目指す保育学生に対して保護者支援に関する必要な支援スキルを明らかにすることができたといえる。

## 2. 審査経過

### 研究目的と論文構成の整合性について

複雑かつ多様な問題を抱える保護者への対応と子育て支援の重要性、保護者支援に関する保育者の専門性の向上が指摘される一方で、それらは保護者が自身の困り感をニーズとして発信し助けを求めることが前提であり、支援の必要性を感じていない保護者や、悩みを抱えながらも周囲の人に頼ることができない保護者については支援の手が届きにくい現状がある。本研究では、保護者の「被援助志向性」と「困り感」に注目し、援助要請の意思決定に与える要因の検討を行い、得られた介入のポイントに注目した子育て支援プログラムを実践することで、保育者と保護者の認識のずれを埋める子育て支援のあり方に関する具体的示唆を得ることを目的としている。本研究では、2章で保護者の被援助志向性、3章で保護者の困り感についての量的分析及び質的分析を行い、その結果及び考察を踏まえて、第4章で子育て支援プログラムの実践研究を行っている。本研究は、以上のように科学的、論理的な根拠から実践へと研究展開が行われていることから、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

### 研究の独創性と発展性および社会的貢献について

保護者が問題状況をどのように認識しており、助けを求めることをどのように捉えているか、どのようなものであれば効果的と感じて助けを求めるかといった被支援者（保護者）側の支援意思を配慮した支援の在り方を探求した点、また、保護者の困り感タイプを4つに分類し、それぞれの特徴に合わせた支援のあり方と、困り感のない保護者に対する支援のあり方について示唆した点については、これまでの関連研究では先端的であり、独創性のある研究といえる。また本研究では、どの保護者も安心して子育てができるような予防的支援として子育て支援プログラムを提案し、トリプルPの実践による効果検証を行った。今後、効果検証から見えた課題を整理することにより、新たな支援プログラムの開発に向けた継続的な研究が期待される。

また、本研究は、多様化する保護者や子どもの問題を支援するために必要な保育者の専門性として、観察力やアセスメント力の重要性を示すと同時に、保護者への情緒的サポート・心理教育の有効性、支援の具体的タイミングについても示しており、変化する子育て環境に対応した子育て支援の実践に貢献する研究であるといえる。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 永井知子 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、審査委員全員一致で合格と判定した。